

馭馬大元記

和装本

ケ 5

48

155





大坪本流馭馬大元記卷之上

序

あら玉乃次子白ひ筆より書給たりし
 ちいぬめ家年の秋は比乃致言は契り
 なとあひ出り禮を其事を不取去集て
 不違はる馬は道を通へしにわくを
 ながくたゞくちの記なるをきりむら
 しく云詠ふも武士の家丹生れてま

弓馬を以て道とはされざるなり学文
とて事業を以て家業を以てせんりし
かりしるは於て書物をきく武を忘
て其事以て為人を我回を於て人の田賦を
さう取らんとし其のたかり其のたかり
ありしあり流漏る牛追物犬追物ハ的狭
物附三々九手投は懸身麻符念蠶目是以
濟射八道とはいふなり又競るといふは



年田之しは洲を中實法社には独り
来たり皇を神家此競る事は日本
此國以治つ悪魔降伏天下安全此所祈
禱ありしは之より大内小者等子月二日
は業ありしは事礼記延喜式より
是へ傳り今も是より源倉所代朝
公此道を以て流ありしと東鑑より
今又武乃るありしは所代母ありし

聖を爲流の風吹流る心地して
大君は清徳を以て之れ其徳を二十
五百人子及侍りきまは家子侍一末既古
実のふくと駟馬大元師の賢人毎々て
むく其人の侍り志をせり侍りて
後先事りては弓馬の及れいや
こは禮儀とれ道ふり侍りて
里奥やい一其の長三寸に
なり

ぬすは頰を川よ小向く龍門の流る
流るんとおもふ志ありといふ
千人の侍りてを侍り侍り
一孫陽伯樂の如く二千五百の流に
いふ人の子を以て之れ其徳を二十
五百人子及侍りきまは家子侍一末既古
実のふくと駟馬大元師の賢人毎々て
むく其人の侍り志をせり侍りて
後先事りては弓馬の及れいや
こは禮儀とれ道ふり侍りて
里奥やい一其の長三寸に
なり

此書の目録馬大元記を號せり
のこゝに付れまゝの目録なり

東武

馬大元師

孫藤定易自叙

大坪本流馬大元記卷之上

目錄

古實常取

一六合被策之事

一取馬込策十三段之禮之事

一前乘之事

右實軍取

一打物態之事

一 太刀討

討刀

首搔刀

野太刀

長刀

一 子鉞態之事

一 組討態之事

一 芝繫之事

附白馬六曲之事

鎧馬

一 唐鞍鳴和宮鳥之事

一 綾羅錦繡之事

曲馬

一 日本曲馬之事

一 朝鮮曲馬之事

一 陣草由由之草

一 日七由由之草

由由

一 陣草由由之草

大坪本流馭馬大元記卷之上

東武 馭馬大元師 村藤定易集編

古實常馭 本心也名下
五馬場同前

一大元師策を取く事年神小むくひ六合板

一七祝詞をあけました熱田鹿湯八幡廿三種

を拜し七策を腰小納れり廿六合板乃

策を神道三種之六板と云と一も他あり

策あり馭馬法乃人前乘れ者不乘乃時

大元帥進之く大歳神小むるひく祝詞
て元の座小玉親なり

○前乘 かひる場角南國寛 主水
も京下場枚京重高源とひりて天宮御よ

里玉寺の御奉なり地乃三返池七返糸納
此地乃二返都合十二返なり隅を三

返陽下 廻りて陽小向ひて騎上
陽丹むるひて下乗す親ものなりり傳

馭馬法登漢下 司馬法朝鮮子理三目

なり其馭馬法を斎夜定兼勅するなり
先策を左く腰下さるは玉女小向く
騎上して策を右小元甲六合被此策被
歩く祝詞をあげ儀式のくとく十二返此
月牧隅乃方圓を乘なる策子三返此
礼とは初冬策被右此腰小さる騎上
て右此腕小くけ後此地乃小玉向時左
此腕小く巻て元の腰小納る也下乗る

... 明人... 卷之六... 七... 八... 九... 十... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十... 二十一... 二十二... 二十三... 二十四... 二十五... 二十六... 二十七... 二十八... 二十九... 三十... 三十一... 三十二... 三十三... 三十四... 三十五... 三十六... 三十七... 三十八... 三十九... 四十... 四十一... 四十二... 四十三... 四十四... 四十五... 四十六... 四十七... 四十八... 四十九... 五十... 五十一... 五十二... 五十三... 五十四... 五十五... 五十六... 五十七... 五十八... 五十九... 六十... 六十一... 六十二... 六十三... 六十四... 六十五... 六十六... 六十七... 六十八... 六十九... 七十... 七十一... 七十二... 七十三... 七十四... 七十五... 七十六... 七十七... 七十八... 七十九... 八十... 八十一... 八十二... 八十三... 八十四... 八十五... 八十六... 八十七... 八十八... 八十九... 九十... 九十一... 九十二... 九十三... 九十四... 九十五... 九十六... 九十七... 九十八... 九十九... 一百



... 明人... 卷之六... 七... 八... 九... 十... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十... 二十一... 二十二... 二十三... 二十四... 二十五... 二十六... 二十七... 二十八... 二十九... 三十... 三十一... 三十二... 三十三... 三十四... 三十五... 三十六... 三十七... 三十八... 三十九... 四十... 四十一... 四十二... 四十三... 四十四... 四十五... 四十六... 四十七... 四十八... 四十九... 五十... 五十一... 五十二... 五十三... 五十四... 五十五... 五十六... 五十七... 五十八... 五十九... 六十... 六十一... 六十二... 六十三... 六十四... 六十五... 六十六... 六十七... 六十八... 六十九... 七十... 七十一... 七十二... 七十三... 七十四... 七十五... 七十六... 七十七... 七十八... 七十九... 八十... 八十一... 八十二... 八十三... 八十四... 八十五... 八十六... 八十七... 八十八... 八十九... 九十... 九十一... 九十二... 九十三... 九十四... 九十五... 九十六... 九十七... 九十八... 九十九... 一百

三才神心むくひてよ流しとあり

古實軍馭

對馭	對馭	對馭	馭馬法
增原定勝	村井猶久	丸義隣	斗藤定兼
幸十郎	忠治	佐助	吉郎

打物態之事

歩兵合太刀三箇之戰

内甲戰 丸身戰 高股戰

歩兵合討刀三箇之戰

真鱗 飛鳥 而鶴翼

歩兵合長刀七箇之戰 太刀 相長刀

水車 披子 薙子

虎乱入 懸込子 左儀波



右儀波

野太刀五箇之戰

五箇之秘事
故安二畧不

予鋒態之事

予鋒子太刀三箇之戰

予鋒二長刀三箇之戰

予鋒二火鎧三箇之戰

組討態之事

小予詰

柄折

實盛附

芝禁之事

芝禁之事は古人の名付り

芝野の古事一は芝禁

芝禁は古人の名付り

芝禁は古人の名付り

芝禁は古人の名付り

芝禁は古人の名付り

芝禁は古人の名付り

て蟻蝟を射面きる。乃少子部
繁とは名付し類なり。世人は騎射の
達人なる。西沙法師は流を汲てその
乃功あり。人をもいなり。古き騎射の書
に其其名見し。きるなり。人なり。
下立ちし。古傳の白馬の曲をそ
あり。きる定氣。下立ち。前下後下あり
魚場あり。下立ち。前より敵来。是は

後へ下立ちなり。後の中。奇来。是く前へ下
立ちあり。其事を勤し。類なり。

古實飭馬

唐鞍鳴和宮馬 唐鞍 唐銜

雲珠 頭総 鼻皮 杏花 杏

葉 八子鈴 銀面尾袋 方金

唐鞍綾羅錦繡 唐鞍 唐鞍 銜曹

龍髮 龍毛総 鼻皮 拱蝶 胎総



錦繡後飭もよ

御者馳驅一参

少定兼 吉郎
堀江弘道 源兵衛

唐鼓の傍より清和帝子後醍醐の傍
より和漢ともしにわりのりより
所飭抄 後陽成院の 清和帝子
小とる一より 詩舟 太平天子 長元日
色雲車駕六部と 作はるれも清和帝子
此飭りあり 又和鞍此飭甲あり 移鞍

二

此飭あり 將軍家 隨身兵 杖 牛車馬料
のり察此飭を 抄 前より 紙 前と 清和
乃後馬を 後進と 以て 其飭も 七日 鞍
此飭あり 亦 以て 料と 以て 將軍家
及び之を 後あり 是成る 此飭なりと
あり

日本曲馬 衆人村井猶久 忠治

盤立

飛越

関貫通

壹橋 下藤 水車

日本曲馬を愈の歎ひよありて武術の
訓より古来細るれ教あり細馬を
以ては俗の多き事少く曲るとは
よる事曲と要せの二字よく其撰の
致あり別高流軍政の書馬教之巻に
之教へ訓へ候法もひらく事なせり
地乃池翔るる乃生徳也細る不為るる

教訓せしむる成りて漢子良言日本に
細るなり近世其例と云人あり
式と令も細ると説り東瀛小教朝公
上洛の折々八田右馬尉知事一疋の細る
と事進せざる所乃文脈味と云る一も
依る不遠至判官能る進奏れ送文子伸進
は千里と池せ屈せし双六盤也と立ぬ
と書守るるも碁盤乗を伝へしなり

Handwritten text in a cursive script, likely a list or notes, covering the right page of the notebook.

Handwritten text in a cursive script, likely a list or notes, covering the left page of the notebook.

盤立坊より馬組討乃打物より
中に居るもの也小船舟乗せく河水
流す舟舟より居立なり是乃延至
以く盤立は江込事也外心の曲あり
皆民用乃為小乗事なり右此理を
伸く志す

朝鮮曲馬

田代忠一撰

馬上立

馬上倒立

馬上横臥

馬醫上仰臥

朝鮮出る馬を教ふ次子して其人小古
歎小して方将なりと教へて以く江込時
を朝鮮人小むく乗事
馬上立を立一参なり馬上倒立はさる
一参なり馬上横臥を横乗一参之馬醫
上仰臥一参圓貫通一なり天和寺
中不吳順伯桂子延いそく代々日本へ

来りて世言を乗とて朝鮮の例を
は爲る者ありといふなり予表りて
比其言葉を以て兵順物也桂子延も人
なり其人の爲る事なる事とて其
と其傳れおとく御して日かたなり
を道とて八曲の内六曲を朝鮮人におと
さるなり是故に西中一秋流し其事
を乗て詠人子見せし日本もくも
と

す其事を知らしめたるなりあはれとも
あはれ武用のたはげしき事なり其術が
きは乗る益なり益なりとていふ
ぬりていふ其事を常小達者丹あり
次一と及ひし其事をなり其の道は
一と歌くことかあはれあはれを乗て其事
なる事なりかた其術なり我つとあ
てよとていふなり

大坪本流馭馬大元記卷之中

競馬目錄

競馬監觴之事

競馬に其の西の事

神事競馬之事

大内競馬の事

競馬追出して百州のあふ事

競馬の法式の事

晴貞播の事
将経抄の事
標下の木の事
見定人お立の事
米振童子の事
日記後の事
舟歌後の事
合証歌後の事

男女の傍言の事
高者乃志の事
競馬詠書の事
附不たる傍言の事
乗人お立の事
出場式の事

大坪本流馭馬大元記

東武

馭馬大元師

斗藤定易集編

謙倉沙代競馬

競馬流瀆馬の支那古代の道なり禮經
本記子云月五日大内卿て競馬并小流瀆
馬を執り給ひ是れ沙代事其月百廿
夜南山の五等流早坂亭之陳之御新
天以く武以子天皇是なり候ひ信長小

たは武進を武としひ給ひしは武を
太平乃本なり治代の君武をくんとある
庭より其武制を競う流禱するなり漢の
元月五日競ふ武乘も也荆楚歳時記の
出書より然る漢を以て後小利ひしは武を
争ひし古の流禱古實なり和漢附合を
制有り天乃の教を為すは神なり神乃道
と為す天道有り神心より發する制有り

少子賢良皇大神云子此は事あり皆々異
國乃乃取用ひするは事なり
競ふは其品あり事なり賢良皇
大神の競馬あり大肉丹執は止る競
馬あり武家丹をてあるは事なり競馬あり
鼻渡ひは競馬あり事なり競馬をくはる事なり
訓を執付とあるは事なり訓を執付とあるは事なり
あまとなり

賀茂競ると大内乃競る事あてかひし中
なりしやいへとも身太神志の競馬は夫言
あり押下を携負の木といひ友人赤色と志
子の出立向り敬言因の人申曹と志志家
の七返返しこめ付傳あ申赤色をたの
方より此を志志色右の方より左に流
神書子赤色をよれとあり志志色を
たしとあり是故子赤装束此方神

け方いおどろく志志東を志志乃方に
なりてありそなたより向らそふと志志色
も競る事志志も志志とあり
平
埒乃ららるる物の携ち負を
乗し人志志此ららるる
は割と神の競馬の事なりと申
大内乃競るは式は神志志とあり

庭子軍旗として其下に右大将
彈正兵部兵庫常力右馬助右少将大舍人
既言首九右少将御負を競ふ之今年
左馬頭先正為せば翌年右馬助先正為
其なり官人の出立を令其繪書より甲
曹朱小佐書り既甲曹を忌み既より御
既方へは福を給ふなり委を倭の古文
にふりて志願也

競ふは馬を逐き牧小部より既甲負せ
し馬を用ひしもの歎に客儀若くは郷
地方より其教ありて競ふ乃馬の出
事なり其ものも集めて是扱ひしもの
之のを乘るなり見定人下本の侍より
速速を分て其位のものも其合を既より
其是扱ひしものも當日不出家人の御
事なり其も負ふ事なり

Handwritten text in a cursive script, likely a diary entry or a letter. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a continuous paragraph of text, though the specific words are difficult to decipher due to the cursive style and fading. The text is arranged in several lines across the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a diary entry or a letter. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a continuous paragraph of text, though the specific words are difficult to decipher due to the cursive style and fading. The text is arranged in several lines across the page.

競る追ふしは百の歩ありと古も文
小見へ侍れなりいし〜兼元二手影日
去小月念の二番の系尾ふ大江言遠依
伯玉文と徳妻定れ言遠も強力小〜
る之上手れ又男中玉文去小男小〜
て無力れ老なり必中玉文負るんを人〜
云へ甲言遠も必定持ぬ〜と思ひいふ
進く前小立しり玉文進て言遠もい

後言遠去小國文が言の七寸を執
て川居んと去玉文を切なり志なり
をれし子綱を於四糸を押し〜平首次
打く走せむり言遠壘を持る〜尾居小
創小國文馬壘なり弦折も〜花りを
中判官親清も傷の末次も渡〜りる
其郎等小言定九郎〜子者打合〜玉
文の平首小抱付〜棧敷小押高て

馬をりて中を四文揚て策を揚て走ると
勝つ及び主上敵感ありて縁二領を給り
り給ふりかゝるを競ふ乗せしめて八百制
ありとていふ程に其事なるべし
競ふは馬の法を務員橋よりして馬を
と以て馬場なりて昔は馬をありて
定人揚策を振動しとて改えとて乗ゆるへ
く揚てとて馬を村河を競ふの事あり

准中程の中をりて右の馬の時を流
にありて流にあり

○競ふは橋のりて四間四果なり
なり也幕をうけて橋の内には舟報合
証報を置事なり

橋の内には床鎧を置る置鯉置靴子
と勝れる也
時法なりて事なり此際より上は是極

に款を以て一通法事なり
標下を質茂の競ふに下木を杵あり
神祕あり鐘倉沖代の標下を又侍あり
て用款事之
是定人出立を友小よりて裝束あり録
倉沖代を多分は直意以て之を
いなり爲帽子愈し小刀指策小末廣
扇子と持法事なり

策振の童子玉垂小刀指扇化粧
髪をを銀のりも元結小く策小末廣扇子
此指し指なり非人より小出立因り之
また右書あり右書あり報をまた法陽
の報なり其指しに習ひあり
日記の役の人出立素袍長袴に侍爲帽
子愈し小末廣あきさを指なり侍爲法番
其付やうの中枚系波を枚小出立事

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The handwriting is consistent and fills most of the page.

しつとつれとを乗人大勢の時を派と纏
てとくしつと

呼報の扱あき素袍長袴付烏帽子小刀米
廣扇子を持たりまゝ呼報の扱やうん
子儀の習ひあり

会証報の扱あきも呼報の扱と因りたり
呼報不随ひく会証報を会する事二儀の
習ひあり

男女廿歳までの扱を童於此扱なり十三歳
より十五歳までを男也童也と云ふれとを
前髪あり髪を束ねて月ひてよ返くまあり
言籠を厚襦の紅の鹿鹿を男也童也中
子儀と深たつ百七寸付き髪を男也中
童子也童也水子に指貫童子烏帽子懸
末廣あきを持り女廿童子を花笠さし
帯化装し水子紅の袴とく末廣扇

子と持なり 競るもく 其侍友人とともに系
連くも其舞を弄て地乃之趣此七色納の
地乃二返於今十二返年月乃返を意之侍
男女の饒多宗おつも其呼報乃及幕を
下しと報を打あり其報もまは侍あり
高き其波と侍波之出立小宗袍小袴小刀
指く鷹帽子魚しと橋下に踏居て見定
人の侍より中より其侍と其持と其場より

一人の侍より中より其侍と其持と其場より
一人の侍より中より其侍と其持と其場より

移鎌倉競馬結番 本以三場勝負

一番 左儲勝 右

秋藤藤原定兼 吉八郎
南部源 久義 浅之進

二番
右 持

三番
右 左勝流

四番
右 左儲勝

五番
右 左儲勝

日根野源弘恒
村井源 猶久
庄次郎 忠治

角南平 國實
飯野平 常直
主水 源平太

黒田藤原 有道
永田源 正明
内藏 平之助

日野源 正脩
飯野平 常直
小三郎 源平太

見定人

馭馬大元師

补藤藤原定易
主税

策振童子

补藤松村

堀江九十郎

守報

雨宮藤原政高
仲石造

合証報

堀江藤原弘道
源三郎

男女飭馬

前田庄之助

記書

前田藤原兼忠
源三郎

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

卷之

高吉

二人

享保十三年申九月十八日

杉録倉競馬結番

右官下三場勝負

一番

左 儲勝
右

新藤藤原定兼

吉八郎

丸 菅原義隣

佐助

二番

左 追勝
右

前田藤原直主

左助

村井源 猶久

忠治

三番

左 持
右

天野藤原忠衆

四郎

南部源 久義

浅之進

四番

左 追勝
右

日野源 正脩

小三郎

粕屋藤原義武

仙之助

五番

左 儲勝
右

近藤藤原壽俊

半助

丸 菅原 義隣

左助

六番

左 追勝
右

近藤藤原壽俊

半助

村井源 猶久

忠治

七番
左 追勝
右

前田藤原直主
粕屋藤原義武
石助
仙之助

見定人
馭馬元師
补藤藤原定易
主祝

策振童子
补藤松村
堀江九郎

呼報
武笠佐伯辰處
民部

合鉦鼓
堀江藤原弘道
源高

男女借馬

前田庄五郎
右字改助

執事

杉原源
重高
源高馬

二高声

二人

享保十三年申七月十九日

主人の出立は侍馬帽子魚一七金紗の
及小手令攸紗乃上衣浅黄指黄尾鞘
鉈寺子小刀根竹の策を初寄に子て

腰にさして呼報不随ひて言出たり

競馬出場

文書乃波料成規を文書に居て自是
にあけてお出願あり 主馬子日記其波
一百歩と歩あり 策振乃童子
日記の波と一百歩と二ありつゝありり
へ 女副の得二人押償たり 日記
其波橋より文書を成り 正面小字

策振乃童子と日記其上あり 策を石
に並て正面小字へ 見定人其馬
を走見する道より歩と出れなり 競
馬其童子見定人と其間一百歩を以
て 勿論二行小字あり 童子
と呼報の波合証報其波と一百歩を二
り小歩む 一馬其馬も一百歩を
二行小字とび歩む 見定人標下に

なり神祈して祝詞をあまね其百童
子及び右の汲人之家く臨居るもの
なり是定人橋子なり正面かむる
舟を船時呼報乃人節を窺ふ是定人
作臥下其内呼報をいり是人報を
すて言道より馬を乗出—先橋子向ひ
く一礼して其無陽を遣還して馬道
より出て外埒小此を船より背あらし

呼報をすむる其時一番の乗人二の
につらり乗出—こめさうけ七座—
を乗らる是定人其七返り—をえん呼
報をす志の船を呼報をすて右の乗人
の頭取あり橋を窺見定人其は
ありひきるをえん策をすり乗人策を
合せ初声をあけり馬出をたう埒く
持意人す—一番小准して定てあり

へし標下に前へよりきね人樽子むらひ
策をあけなすし是定人其勝をよくえて策
を合はぬ之身定人策を合しつねを是く策
振の童子策を振るふ事其何呼報と合証
較を合せしむらむ其言さるる名南や
分て勝つぬ人の姓名を呼ぶぬ之二番三番
ホくは諸書まことしけり

大坪本流取馬大元記卷之下

大坪本流取馬大元記卷之下

草鹿目録

- 草鹿盪觸之事
- 山神三口餅之事
- 草鹿檢身之事
- 草鹿不用おらけ事
- 拾次之事
- 矢鎗篋之事

角総乃事

緩笠此事

射子装束の事

必勝の事

策乃事

鹿扱やう附申此事

鹿釣縄此事

馬具の事

鹿惣役此事

日記役出場の事

日記役々所小座やうの事附鹿垣此の事

検身の事

鎌瓦縄の事

移鎌倉所代草鹿射子々組平此の場此の事

移室町家所代草鹿射子々組本此の事

場の事

同移謙倉所代草鹿射予々但巻石下
る場の事
同移室町家所代草鹿射予々但巻石
下る場の事
日記中付小品あり事
矢評浅の事
濟射之葉の事

大坪本流馭馬大元記卷之下

東武

馭馬大元師

存藤定易集編

草鹿

草鹿を鎌倉右大將頼朝公富士の狩倉
とてふんたためすの相模山を狩し
寺より多勢に射予鹿以浅く射換
はれより其内羽をを飲んで申候矢
とありきりと頼朝公を然と云らん

ありて下河邊庄自平二友庄前宗
光也甲三郎季澄波是以上三士を以て
是沙路あり皆蒼く高時弓馬の達人
是三浦女義澄なり彼り又義の上総女
廣常、勅取流く小野國形次野の妖術
を將して上流一御感小ありるなりとの
稽倉切ぬるあり彼等なりて以るある
一也、頼朝公実りと思ふく彼是五人を以

これ其故を伴合ら頼朝評定して鹿小
ありれ矢毎の鹿と云との説を考へ弓矢
を射くや其身不大概十一枚の中其矢多し
以是多鹿の法とん結ぶる十一枚ありて
止らざる鹿あり少し十一枚を略して
九枚不定也草を以て鹿を作り弓矢
一とん東鑑小建久三年八月廿三日三浦
比合梶原等の武士を以て評定する

わくは傍廬ありを執と呼庭の形
ありは弓杖を物舎小ありて
射する事を見へり是に草鹿に
漁師とけり執りのなり

山神三口餅といふ山祇神と辨るる事
なり草鹿と初く具りたる時を
三口餅を備へて事なり初に
け餅白木の餅忌ふに餅なりこと成

三也一爰乃餅とりなり其供酒也
山太郎の為事ありを禮と検見其
汲小准く事と勤む執なり
三口喰に法式あり録倉御代朝之の
若君萬年表初く将倉の節執り云
大友石近の監といふ甲三郎季隆と表君
此を射士といふ要母なり其終ふを外
踏る士といふことなり

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a journal entry. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a personal communication, possibly a letter to a friend or a family member, given the informal and somewhat emotional tone of the writing. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a personal communication, possibly a letter to a friend or a family member, given the informal and somewhat emotional tone of the writing. The script is dense and fills most of the page.

東鑑小人之河野踏る土の業小に侍あり
若君一匹の麻志けこの中より出るるを
あそふも多し羽ぶく成ぬくんで麻小
のり家別麻面りりれと朝朝公あやめ
かろくも後ひ給ひを給ひる小四節矣
口脩を就て其脩二是なり三口喰れ法
式あり初の一口を宗光中代二口は季澄
終乃三口を曾我祐能なり祐能は宗光

季澄は法子似せくも道に頼能公之口に
かゝるは其真とあるもいと似とあり
一は二口脩あは古来より其示ある中
も又入きり
麻小はまゝ草とひくゆるなり鎌倉法
代と室町家法代と麻の株や其示
あや鎌倉法代と麻を前代流能くこと
く草と作りて其格とあしく矢

中の早も如く是故小換見とあり麻
に矢中きる内射手矢声とあり麻
の初とんそ日記中と付きる事あり
室町家といふては麻と出れ麻の古
とく保りて矢あつたりれ早而れりしに
いはきの不中とやと矢取つる
小換見とあり麻とあり換見とあり
ありありと終る勅了記事と武田

小笠原の騎射の書と換見と射手
にありしとて其書を以て勅了といふ
也小笠原家あり小笠原信濃と小笠原は
前より同族なり同族なり武田の家
武田大膳と入坪家とは細川右京と
勝元朝日同様なり如賀守入乃多賀
等後より思ふべきもて大坪流の門人
ありは是麻と主祝定易本は是衣下

五馬場の草麻検見を勤る事あり
弓を八張弓の内相位弓と別れる事
然るとも室町家の末より言志の教へ
とて用を執事なり菱秋を塗るに
弓と執事春を白木秋をといふなり是
相位弓にありては言へる事なり
○拾次を専るの法あり諸の箇より極秘
事へ古き書より武士代軍よりむく

度と不拾次と無事古例と云はれその
なりとも執事
矢と端と筒丹い事執事もく物事々に
ありてあり
角縁を古き事執事なり弓石節ひ
とり無事そのなり大執時を弓手顔
事手執無事也
○笠を緩笠之 古来市目笠とく賊男

此より考るに、蓋の板の肉之其の蓋を
麻かひの蓋、魚かひの蓋あり
其小手上衣石帯、鹿箱、以勝、是等之
以勝、乃中、小は、小橋、を、く、ま、の、
以勝、を、あ、あ、秋、上、毛、ハ、本、式
なり、其、先、の、以勝、以勝、を、神、事、に、用
時、を、切、り、に、多、ひ、あり、熊、以勝、虎、豹、以
勝、水、豹、以勝、乃、以勝、あ、別、合、の、以勝、を

麻乃白毛と、前小、乃、毛、事、之、ま、く、塗、以
勝、あり、老人、乃、毛、小、は、れ、り、ろ、く、以
勝、とい、なり

策を根竹の策と、乃、毛、事、を、乃、腕、費
以勝、を、腕、母、造、く、む、ま、ひ、考、事、
む、ま、ひ、乃、毛、ひ、く、一、清、の、末、張、業、の、子
む、ま、ひ、乃、毛、事、の、なり
麻、を、春、秋、乃、毛、事、く、張、り、板、小、習、ひ

Handwritten text in a cursive script, likely a diary entry or a letter. The text is written in a dark ink on aged paper. The lines are somewhat faded and difficult to read precisely, but appear to be a continuous paragraph of text.

Handwritten text in a cursive script, likely a diary entry or a letter. The text is written in a dark ink on aged paper. The lines are somewhat faded and difficult to read precisely, but appear to be a continuous paragraph of text.

あり串を木小く掛るなり是魚の串
とは遠い麻を串より少くは打魚串は
せう類事なり

麻約縄を赤縄と青縄と二色の内を主
に好むは昔小判と知也
馬具を散て定規法なり富士の巻持
の書あり先く此馬子何鞍かおくとこれ
おれと此を定規法なり是は是の軍

家の前並後並のふ小判七口鞍を
用はれおれ事なり

草麻出場

麻魚の汲人三人千両を人等功者
小判を小判事なり人等鳥帽子
系袍袴印二人等纏小袴斗志し手
振持男四人斗人等串と持歩お又二人
麻と拘へおれなり

日記の及侍鳥帽子小系袍袴を志し一歩
度あき持く小系袍志き野男に文
巻前小指せ又小系袍志き者二人引
連勢小歩し日記前へ立候なり
日記之者其下座し日記と見く麻
垣之者二人小系袍小袴志き手比杖
杖と突二切小歩し麻の比方右左立
休座し

検見日記の及座し正面小出り
き野と見く馬に乗出し麻杖女
比方小系杖留く誰うあると呼小麻垣之
者おく其内検見麻とは小と掛多
程と向小麻垣之者答く野分の麻に
御下小歩見あるしとよと云ふ小随
て検見多杖静小ゆせく麻に乗出
掛守る候と見く野分の麻小掛する

と云て日記所の右方に五百歩く此を
取之其化をんくうた郎衆出を
り後々の射手の面へ衆出を
日記下れ前子いりては片留の礼を
用へ一衆返正内衆母むひて衆
とありて毎り外埒に化をるるなり
良と押の射手も馬場の内小化
検見とくく検見策と腕より扱て腕小

掛る射手も是は改身く矢と毒ひる
と静か出た之射手一毎り射る時検
見居替りて右の矢を取冷味する
。鎌刃繩を一種の魚頭なり葉は用
あま一室町家の書は葉を河所振る
らくは魚させしぬ事なりと常人
を減美思ふれり吏とある一と騎
射の書小と出くく即ち道より衆

少老人少人多ある一とよきは海兵
 繩を小笠原武田大坪流ともいふ
 あり義孝公の秘書小あそび一軍奴
 三種の傳の内小と入らるるに繩あり
 尋と名を小口傳あり

杉鎌倉御代草鹿射子々組本々

山神三口之餅

馭馬大元師

新藤原定易 主統

新藤藤原定兼 吉郎

●●●○●●●

近藤藤原壽俊 半郎

●●●●●

織田平 信興 刑部

一○●●●●●

鳥居平 忠寧 主計

○一○●●●一

村井源 猶久 忠治

●●●●●

堀江藤原弘道 源善

●●●●●

角南平 國寛 主水

○●●●●

日記

飯野平恒春彦作

享保十三戊申九月廿二日

第百三十三號

日記

癸卯年

正月十一日 晴 未 〇●●●●●

正月十二日 晴 未 〇●●●●●

正月十三日 晴 未 〇●●●●●

正月十四日 晴 未 〇●●●●●

正月十五日 晴 未 〇●●●●●

正月十六日 晴 未 〇●●●●●

正月十七日 晴 未 〇●●●●●

正月十八日 晴 未 〇●●●●●

正月十九日 晴 未 〇●●●●●

正月二十日 晴 未 〇●●●●●

正月二十一日 晴 未 〇●●●●●

正月二十二日 晴 未 〇●●●●●

正月二十三日 晴 未 〇●●●●●

正月二十四日 晴 未 〇●●●●●

杉室町家御代草鹿射子々組本

弓太郎 近藤藤原定易 吉節 ○○○●●●

近藤藤原壽俊 羊助 ○一○○●●

織田平 信興 判部 ●○一●一●

鳥居平 忠寧 主計 ○●一○●●

村井源 猶久 忠治 ●一●●●●

堀江藤原弘道 源君衛門 ●一●●●●

押 角南平 國寛 主水 ○○一一○●

馭馬大元師

檢見 近藤藤原定易 主祝

日記 飯野 恒春 彦作

享保十三戊申歲九月廿二日

杉鎌倉御代草鹿射子々組 本

馭馬大元師

山神三口之餅 近藤藤原定易

弓太郎 近藤藤原定易 吉節 ○○○●●●

近射士 鳥居平 忠寧 主計 ○●○一●●

九菅原 義隣 伍助 ●●●●●●●●
 前田藤原 直主 左助 ●●●●●●●●
 村井源 猶久 忠治 ●○一一○一
 堀江藤原 弘道 源若衛門 ○○○一●●●●
 近藤藤原 壽俊 半助 ●●●●●●●●

日記前田藤原兼忠 源若衛門

享保十三 戊申 歲十月十九日

杉室町家御代草鹿射子々組愛宕下馬場

近藤藤原 定兼 吉郎 ○○○●●●●●
 鳥居平 忠寧 主計 一●●●●●●●
 前田藤原 直主 左助 ○●●●●●一○
 村井源 猶久 忠治 一●○○○●●一
 堀江藤原 弘道 源若衛門 ●○○一●●●●
 九菅原 義隣 伍助 ○●●●●●一○
 近藤藤原 壽俊 半助 一●●一○●●一
 檢身 補藤藤原 定易 主稅

日記前田藤原兼忠 源若衛門

享保十三戊申年十月十九日

○日記中付物事にてしよ申くは
あね事なり習ひてしよ申くは
さぬなり

此之衣下馬場小く室町家草庵の形
うら若原此壽俊乃矢小版く甲の矢あり
編く事この矢あり物事少く矢評談を

あり物事なり
弓太郎若原定兼の早矢中甲なる少
検見矢声とむとくも取あ
矢下を見ても弓ふれ礼とて其出立其
態を初矢を命する人近射士の子矢
とありしり多物少くたねく初矢を
あね押の早矢とひくも中を物事
なげ初矢とはのくもあり其初矢皆

古実を以ての子を奉るに凡そ草席小
弓太郎押込射士のるの立所は古来
より黄鼠の所なり大の時曰く此立
所は立處に上下の立所とて何れ其
日の黄鼠は立所とあるは是を子孫
見承英をす奉事なりは傳

草席と唱へ草席といふは古のあり
八魔的八的の習ひあり是の處といひ

まろりて唱ふるは立處とつけてはよと
習ひあり奉事なりなりそのあり馬
山はついでとていふは古のあり古来
より其法其傳あり奉事とあるは

one of the best of the kind
I have ever seen and it is
very good and very good
and very good and very good
and very good and very good

